

今年で9年目となった東日本大震災。災害日となるこの時はコロナウィルスの騒ぎによって追悼セレモニーはもちろんのこと、コミュニティ支援となる各種イベントは中止せざるを得ない状況となりました。

3月11日当日南三陸町へと向かい出来る限り安否を問えるようにしました。そして、午後2時46分には現場に立ち参加出来ない方々にライブ映像で過ごせればと考えました。場所は防災庁舎、さんさん商店街近くとなる南三陸町復興公園を選びました。ですが非常に寒く強風であったために断念しました。そこで志津川の袖浜に設置された牡蠣小屋でライブ放送を流しました。そこに同行されたのはMigiwa氏であった。Migiwa氏は11日前に災害復興住宅において9箇所コンサートを開催する予定でした。ですが7箇所が中止となります。残る3箇所で開催されました。そのうち仙台市Y災害復興住宅は自治会長と何度も話し合いましたが「このイベントは継続します。」と言われました。その理由は、何もかも中止となると気が滅入るとのこと、年配者が顔を合わせる機会をなくし安否が問えなくなるとのことでした。その代わりに当日会場に来られるときには誘わない、マスクをする、会話を控えるなどを付け加えます。当日参加者は少数でしたがお互いを「2週間ぶりだね。」と言われ喜んでいただけました。実は背景に3月11日近くになりますと、テレビ等で当時の映像などが放映され悲しみを思い出す方はたくさんおられます。そんな時に会話をすることはどれほどの助けになるでしょう。このような配慮には町内によるきめ細やかな調整が必要かと考えました。

この日いつもなら被災地に大勢の方が来られますが、どこに行っても人がまばらでした。これでは「忘れない」というメッセージを被災者に発信できるのだろうかと思いました。事実この日のために「宮城三陸311東日本大震災追悼記念会準備委員会」沿岸部で活動するクリスチャンネットワークは現場の状況を調べ、気配りしつつ一年間の準備をしてきました。今年の会場は気仙沼市で周辺が復興建設が進みもっとも海側に近い場所に建てられた「創ウマレル」でした。ご奉仕されるアーティストをはじめ、参加される方の一体を得られるものと信じていました。それが中止となったことには全員が苦心の思いとなりましたが、今まで大切な関係を築いてきたものとしてはリスクを避けることの方が重要でした。つまり3月11日にクリスチャンはそばにいるというアピールでした。また「忘れない」の表明ともなるのです。それでは、なぜ内外に向けて伝える必要があるのでしょうか。そこには災害から発生した課題があります。また地方で抱えるそもそもの社会問題があるからです。被災地は未だコミュニティ再生の途上であり、様々な不安を一人で抱え込んでしまうという危機感があります。例えば最近の話ですが、ご婦人と成人された娘さんお二人と共に災害復興住宅に入居され5年が経ちました。しかし今年から家賃据え置き制度の期限を迎えます。それで家賃の具体的値上げがわかり検討した結果、二人の娘さんとの同居を諦める決意をされました。将来には値上げすることが分かっていたのですが、被災地から仙台市に転居し、娘さん二人が新しい仕事に就き頑張った結果、所得が上がり家賃も上がった、結果母親を一人残し転居するしか経済的解決がないと考えたのです。何やら切なさを感じる一例です。その他に、8050問題、大人発達障がいによるグレーゾーン課題、災害等によるPTSD、独居老人、孤独死、経済不安、マイノリティ問題、自死、死別家族、父子・母子家庭生活の課題などです。元気を取り戻す家族や個人もおられる中ですが悩む人は多くいるのです。

南三陸町（社協）では「豊かな関係作りを目指した地域再生」をスローガンとしています。私たちもその関係作りに共感し協働したいと考えています。それと2011年から時間が経つほど泣き言が言えない状況が起こり、かえって「生きていてよかったのか」と自答される方が増えているようです。ですから私たちは丁寧な愛と希望を届けたいと考えるのです。

基督聖協団仙台宣教センター 中澤竜生